

五郎兵衛用水を歩く

— 見学ガイドブック —

長野県佐久市

五郎兵衛記念館編

口 絵

五郎兵衛用水の開鑿 5

1 生命の水 5

2 市川五郎兵衛 6

3 県史跡五郎兵衛用水跡の見学ガイド 14

ガイドマップ 15

1 源 水 16

2 取り入れ口 17

3 山堰・掘貫あと 18

4 片倉隧道と遭難碑 20

5 布施川掛樋と大日如来 21

6 八幡制札場 22

7 矢島地区と用水路 23

8 上原大盤台と分水 24

9 つき堰(土樋) 25

五郎兵衛用水の維持・管理 26



(故 柳沢本也氏画)

◀ 当て普請に行く人々

歩いて、そして……

佐久市五郎兵衛記念館

市川五郎兵衛は、「辞世」以外自らを語り人生観などを述べた書物は残していない。ただ、自分の生涯をかけた五郎兵衛用水を残しているだけである。昔の人たちは、この水を「御神水」とよび大切にしてきた。年に一度の用水浚いには、新しい紺袴こんこまはきに白い手ぬぐいなど、服装を新たにしておかけたという。神の水として受け止め、用水浚いに汗することで、五郎兵衛への敬愛の思いをつちかい、水の徳を理解して、それぞれの生活を生き、村づくりに励んできた。

昔の人は、用水の維持経営に苦勞すればするほど、その中から五郎兵衛の大いなる徳を知り、なお一層の敬愛の念を深めてきた。私たちが今日、五郎兵衛と用水を知るには、やはり、生命の水を流しつづける用水路を歩き、土と人を愛した鑿のみの跡をたどるしかないのである。

五郎兵衛用水絵図



正徳2年(1712)ころにつくられた絵図。春日村(現佐久市)の岩下川(細小路川)と湯沢川の合流点で取り入られた用水が、掘貫を抜けたり布施川の上を樋でわたしたりなどして、徐々に高度をさげながら五郎兵衛新田村まで流れてきて、それがさらに上原・中原方面、下原方面、相浜方面(現佐久市)へと分流されている様子が描かれています。

五郎兵衛新田



五郎兵衛新田と浅間山



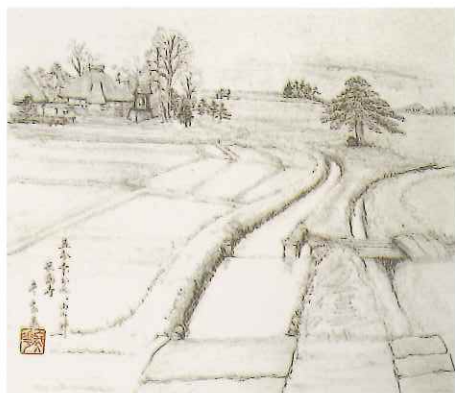
苗代桜と記念館



五郎兵衛新田と蓼科山



井泉水句碑



旧用水堰と長念寺 (故 柳沢本也氏画)

五郎兵衛記念館



◀ 江戸時代を中心とした、この村の歴史を伝える古文書が約6万点保管されていて、歴史研究のため役立っています。

▶ 五郎兵衛新田の開発に関係する史料をはじめ、この村の歴史を教えてくれる数多くの古文書、写真、絵図、農具などが展示されています。



旧浅科村では、昭和35年から県営農業用水改良事業がおこなわれました。その結果、用水路の維持・管理などのためにかつてのような苦勞をしなくてもすむようになったわけですが、同時に旧用水路の姿も大分変わってしまいました。そこで、五郎兵衛用水の歴史を中心とした先人の血と汗の歴史を永くとどめようとして、昭和48年に設立されたのがこの五郎兵衛記念館です。

五郎兵衛用水の開鑿^{さく}

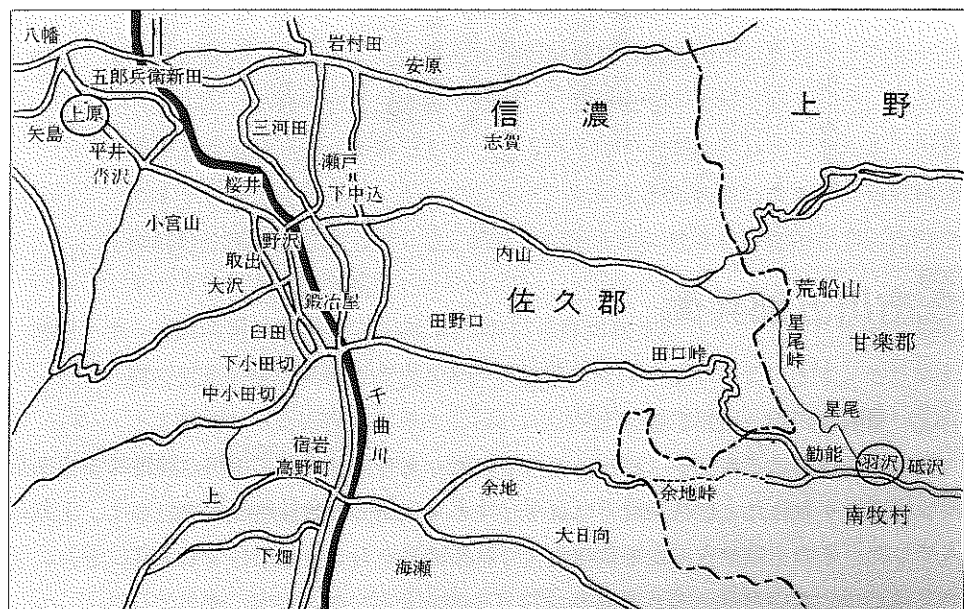
1

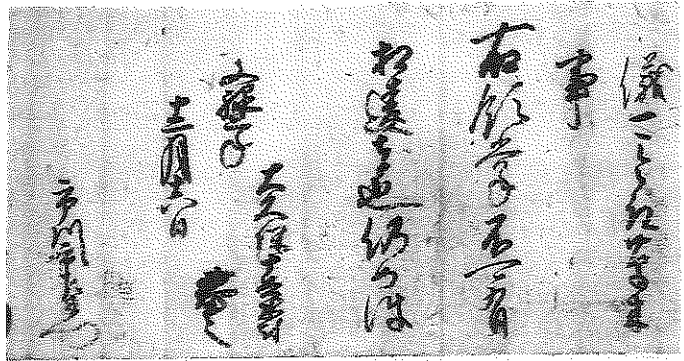
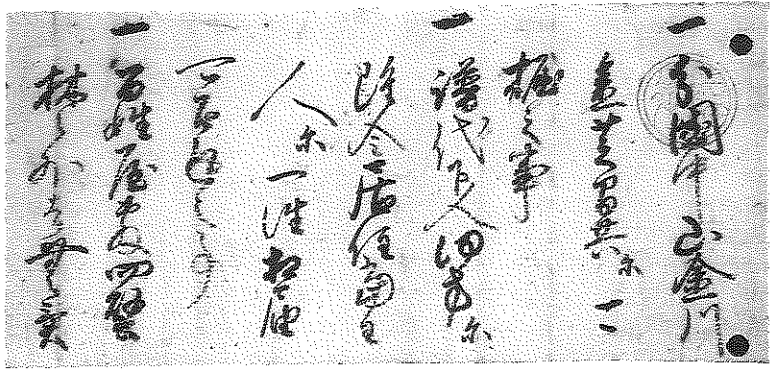
いのち 生命の水

五郎兵衛用水は、江戸時代のはじめ寛永年間に、市川五郎兵衛真親^{まねちか}が中心となって、旧春日村（現佐久市）より旧五郎兵衛新田村（現佐久市）まで約20キロメートルもある長い道のりを引いてきた用水です。その開鑿^{さく}のために人々はたいへんな苦勞をし、その後も用水を守るためにさまざまな苦勞を重ねてきました。

しかし、五郎兵衛新田村はこの用水によってはじめてできた村であり、用水は農業用としてだけでなく、飲み水や火の用心水としても利用されていました。まさに五郎兵衛用水は村人の「生命の水」だったのです。

地図（五郎兵衛の生地南牧村と五郎兵衛新田）





分国中山金川

金芝間共に可レ掘之事

譜代下人何方に

雖レ令レ居住一当主人に一往相届可レ召返之事

百姓屋敷四壁林之外は無ニ異儀一可レ令レ取一草木一事

①、分国中山金川

金芝間共に可レ掘之事、

一、譜代下人何方に

雖レ令レ居住一当主人に一往相届

可レ召返之事、

一、百姓屋敷四壁

林之外は無ニ異

儀一可レ令レ取一草木一事、

右領掌不レ可有二

相違一者也、仍如レ件、

大久保十兵衛尉

奉レ之

文禄二年

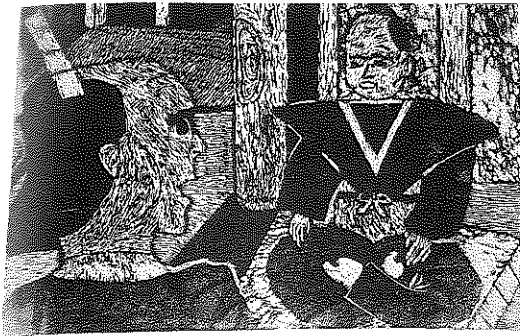
十二月十六日

市川市左衛門

2 市川五郎兵衛

① 開発にのり出すまで

市川五郎兵衛は元亀2年(1571)6月9日に、上野国甘楽郡羽沢村(現群馬県甘楽郡南牧村)で生まれたと伝えられています。つまり五郎兵衛は信州の人ではなく、上州の人でした。その上州の人がなぜ信州佐久で新田開発をおこなったのでしょうか。それについては二つの理由が考えられます。



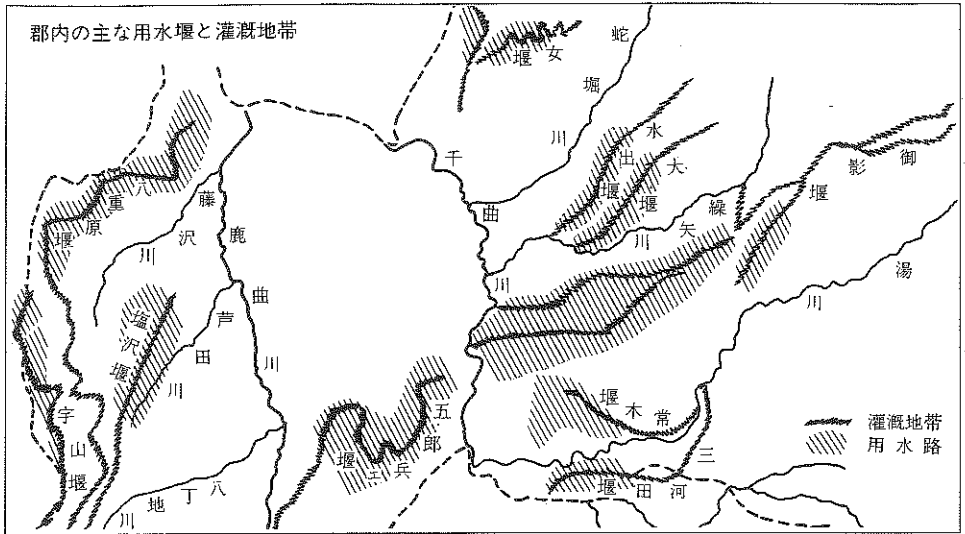
▲ 家康と対面する五郎兵衛（版画）



理由 1. 武田信玄の家臣であった五郎兵衛の曾祖父である市川右馬助が、佐久の地（小田切・高野町および蓬田・桑山）に領地を与えられていました。とくに蓬田と桑山は五郎兵衛新田となった土地とはすぐ隣り合わせですから、土地のようすをよく知っていたのでしょう。しかも五郎兵衛の生まれた羽沢村は田口峠を越えるとすぐ近くで、佐久とはそんなに遠くない場所にあったのです（5 ページ地図参照）。

理由 2. 五郎兵衛12歳の天正10年（1582）、父四郎兵衛がつかえていた武田勝頼が織田信長・徳川家康に攻められ、武田家は滅ぼされてしまいます。これによって領地だった南牧にひきこもっていた四郎兵衛に対し、江戸に入城した家康から家来にならないかとの誘いがありました。天正18年のことです。しかし、四郎兵衛は病身で勤めかねるなどのことを理由に、この誘いを断わってしまいました。

3年後、家康は再び四郎兵衛を江戸に招きました。そして父に代わって出



府した伴の市左衛門(五郎兵衛)が家来になることを断わったので、「家康の領地の山金、川金、芝間を切りおこして、家来を扶助するように」との朱印状(資料6ページ)を、大久保長安を通じてさげます。文禄2年のことです。これが、市川家の鉾山(砥石山)を開発したり、新田開発をする根拠となるのです。また、市川家の側にも鉾山開発や新田開発をしたいという意向があったと思われます。市川家は天下統一に向かう当時の気運の中で、鉾山開発や新田開発などの産業振興の途を選んだのだといえましょう。

② 五郎兵衛新田の開発

こうして、市川五郎兵衛は佐久地方の新田開発にのり出します。そしてまず、三河田

貴様御申上申事申すに領内飯盛嶽の内二子池より水筋を引下りて見立申上申事申すに
水筋を引下りて見立申上申事申すに
芝間開発致されし旨申上申事申すに
右の段役達し申すべき旨申上申事申すに
寛永三年
十二月

市川五郎兵衛殿

高木三左衛門
金田靱負

貴様（五郎兵衛）儀、御朱印の御趣意を以て、領内飯盛嶽（蓼科山）の内二子池の水筋、潜り篠水ならびに鬘水の下たりを見立て、岩下村芝間開発の儀申し立てられ、聞き届けられ候ところ、このたび右の水を引き入れ、春日村より井水を通し、矢島原の芝間開発致されし旨申し立てられ、執達を遂げ候ところ、兼ねて平尾右近を以て申し立てられ候趣もこれあり候につき、その通り聞き届けられ候、なお向後（今後）差し支え等これあり候おは御申し立てならるべく候、右の段役達し申すべき旨申しつけられ、かくの如くに候、以上

寛永三年寅十二月

高木三左衛門
(花押)
金田靱負
(花押)

市川五郎兵衛殿

新田・市村新田（ともに現佐久市）の二新田を開発し、いよいよ五郎兵衛新田の開発にとりかかることとなります。

当時この地方を支配していた小諸藩から「矢島原の芝間」（のちの五郎兵衛新田）の開発を正式に許可されたのは、寛永3年（1626）12月、五郎兵衛56歳の時のことでした。その「許可状」は上掲のとおりです。

さて、その時までこの地は不毛の草原でした。水田をつくるために必要な用水がなかったからです。ここに用水を引いてくることができれば、すばらしい水田地帯をつくることのできる、そう五郎兵衛は考えました。

こうして五郎兵衛の水源地探しが始まりました。そして、ついに五郎兵衛は水源を見つ



▲水源地に建つ石碑



▶水源近くの大河原峠より
五郎兵衛新田方面をのぞむ

けました。それは遠く蓼科山の山中に湧いている湧き水でした（別名 五斗水）。その水源の水を岩下川（細小路川）に落とし、湯沢川との合流点（佐久市春日）でせき止めて取水し、そこから山に沿い、掘貫（トンネル）^{ほりぬき}をうがつなどして用水路を築き、当時矢島原とよばれていた五郎兵衛新田まで用水を引いてきたのです。

さらに、五郎兵衛新田に到達した用水を、村で最も高いところを流すために盛り土をして、その上に用水を流すという工夫もしています。これは「つきせぎ」、または「土どい」と呼ばれていますが、その長さは千メートル余りに及んでいます。

難工事は「つきせぎ」ばかりでなく、掘貫を含めた岩間せぎは1,850間にも及び、このほか布施川の上を渡す「掛樋」^{かけひ}など、当時の土木技術を考えて大変なことだったことが推察されます。測量技術などを含め、当時としては高度な土木技術によって五郎兵



葦科の山間に入ろう



春日村の取入口から矢島原まで 4里半 45間 (約18キロ)

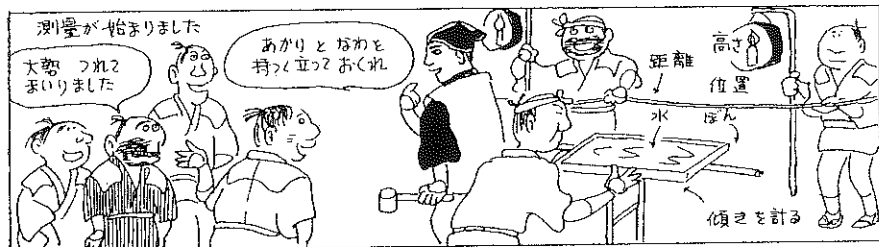
まず鹿曲川を堰止め用水路に流し込む

片倉はじめ掘り抜くすい道(すい道)は斗ヶ所

布施川は掛樋を橋渡しをする

上原から下原にかけて低地だ。掘れないから土を盛って堰を築く

注 地名は終りの地図を参考



測量が始まりました

大勢 つれづれまいりました

あがりとなわを持つて立つておくれ

距離

高さ

位置

水

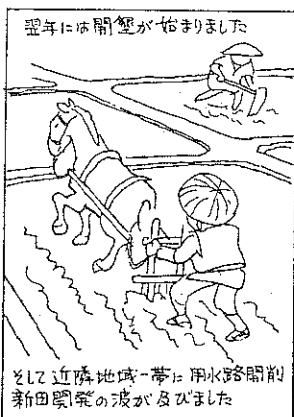
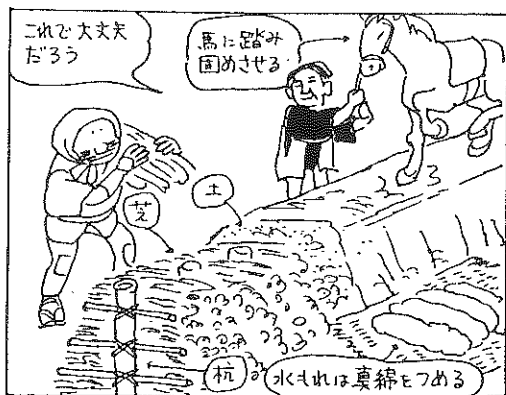
ぼん

傾きを計る

衛用水はつくられたのです。その全長はおよそ20キロメートルで、完成したのは寛永7、8年ころ、つまり足かけ4、5年を要した大工事でした。そしてこの用水をもととして開墾がすすめられ、今日的美田地帯がつけられたのです。

なお、この開発の資金は全部五郎兵衛が出したと言われてはいますが、その後の研究によって、その金は五郎兵衛の個人的な借入金や砥石山の運上金を借用したもので、五郎兵衛所持の資金を含めて3,812両よりさらに多かったと推測されています。

用水路が完成すると五郎兵衛は上州の関係者はもちろん、この地の人たちや開墾を希望する近くの村の人たちにこの原野を耕すことを許しました。そして寛永8年には、すでに高439石4斗7升の開墾をみ、同19年には515石1斗1升となり、荒れはてた草原は一望の水田地帯となり、当時の小諸藩の検地を受けて立派な村として認められました。また、寛文年間(1661~72)の末には実に870石余りの村高となっています。



このように五郎兵衛用水は、五郎兵衛をはじめとする先人たちの血と汗の結晶でしたが、これを維持・管理するのがまた大変な仕事でした。五郎兵衛用水は、いわば土を固めただけのものでしたから、大水や落盤などでときどきこわれたからです。このため村人はその補修にも多大の費用と労力をついやさなければなりませんでした。

そうした努力は、江戸時代だけでなく、明治・大正・昭和の時代まで続けられてきました。その心配がなくなり、用水が豊富に供給されるようになったのは、実はつい最近のことでした。昭和30年代なかばから、五郎兵衛用水の大改修工事がおこなわれ、およそ10年の歳月をかけて近代的な用水に生まれかわったのです。



▲ 市川五郎兵衛の墓



▲ 眞親神社

辞世

眞二心名自性
尋常寂照靈家風
九十四歳花月
今日靈来似夢中

生も死も唯その
ままそ其まをね
はんといはん言の
葉は何
臥雲圃心

▲ 辞世の句

市川五郎兵衛と用水開発の略年表

年号	西暦	出来事
元龜 二	(一五七二)	市川五郎兵衛 上州南牧羽沢村に生まれる。幼名市左衛門、のち家統をつぎ五郎兵衛眞親と改める
天正 一八	(一五九〇)	徳川家康、八月江戸入城
文祿 二	(一五九三)	家康 開発許可の朱印状を与える
元和年中	(一六一五)	信州佐久に入る 三河田新田の開発を行う 市村新田の開発を行う
寛永 三	(一六二六)	市川家、砥石山の本格的経営を始める
〃 八	(一六三二)	小諸藩主松平因幡守の開発許可状を得る
〃 一〇	(一六三三)	五郎兵衛用水完成する。このころ最初の用水路の一部を廃止し、新たに宝泉寺裏から矢島山に隧道を設ける
〃 一九	(一六四二)	五郎兵衛新田に最初の検地が行われる
慶安 一	(一六四八)	小諸藩から知行地・屋敷を与えられる 相浜へ分水を許可する
寛文 一	(一六六一)	水路の要所四か所に制札が建てられる
〃 五	(一六六五)	九月九日五郎兵衛この地に亡くなる行年九四歳
明和 一	(一七六四)	住民徳を慕い偉業を崇敬して眞親神社を建立して、その霊をまつる

3

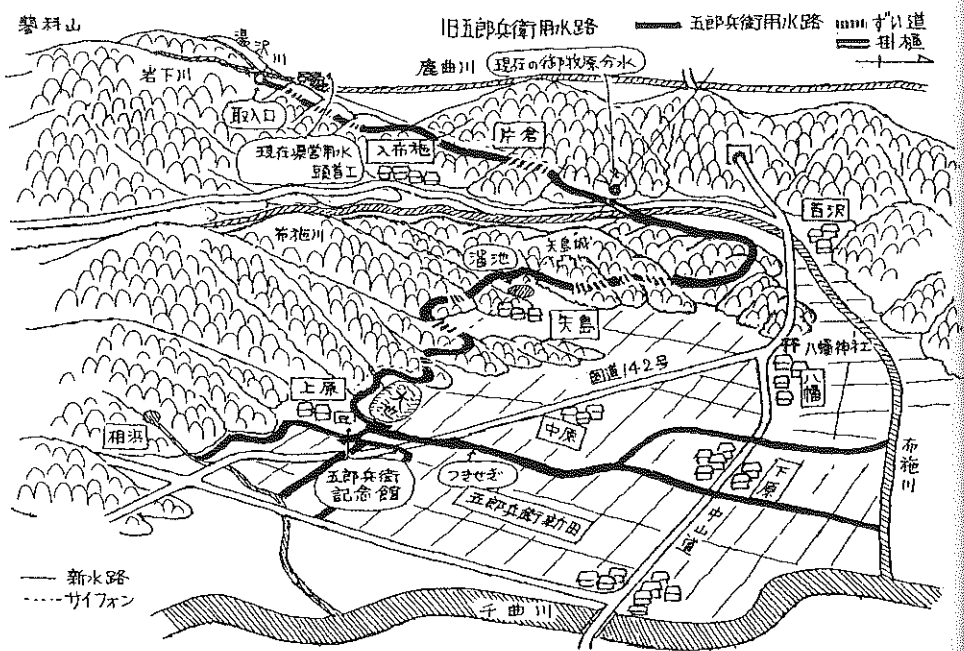
県史跡 五郎兵衛用水跡の見学ガイド

1 順コース (流れに沿って)

- ①源水→②取り入れ口→③山堰・掘貫→④片倉掘貫→⑤布施川掛樋と大日如来→⑥八幡制札場→⑦矢島地区→五郎兵衛記念館 (真親神社・墓所) →⑧上原→⑨つき堰

2 逆コース

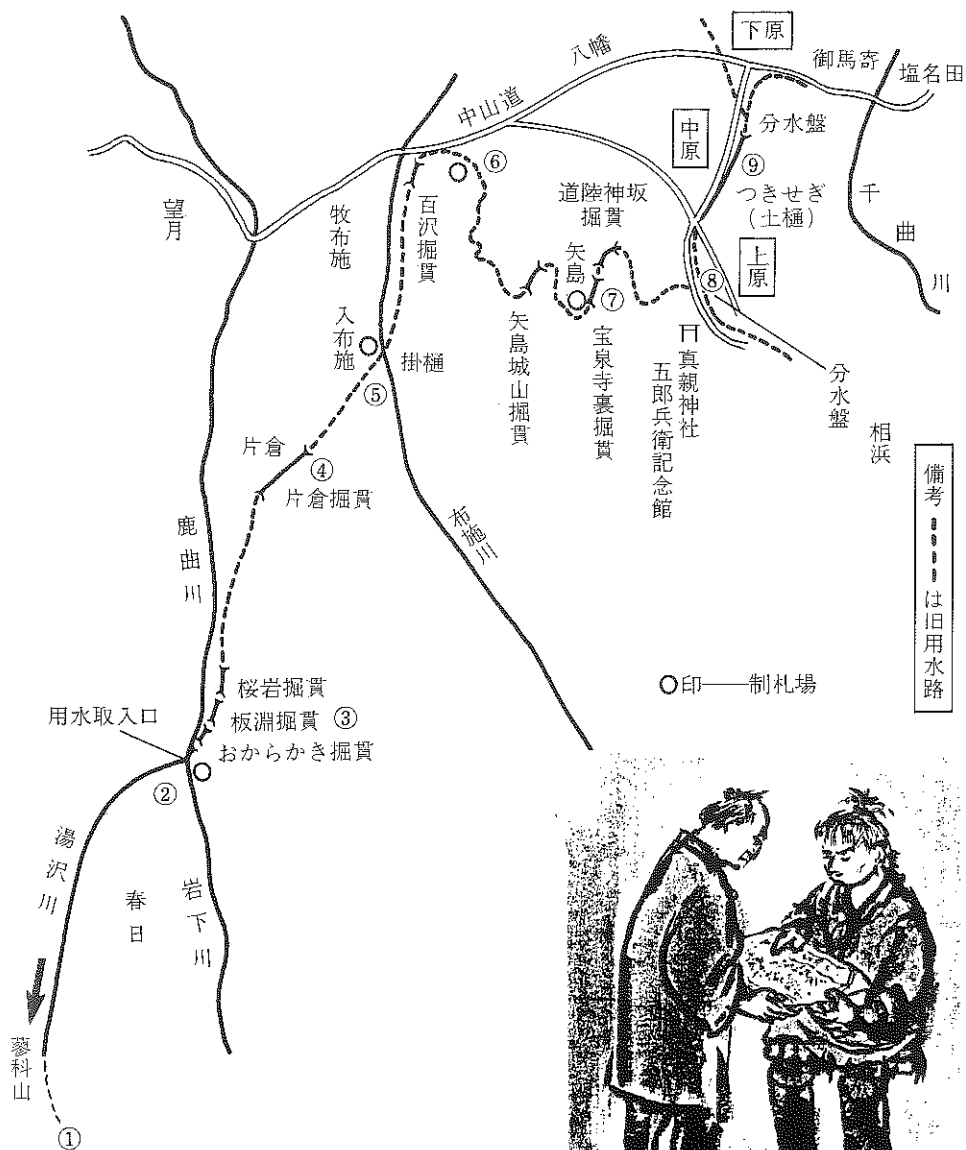
- 五郎兵衛記念館 (真親神社・墓所) →⑧上原→⑨つき堰→⑦矢島地区→⑥八幡制札場→⑤布施川掛樋と大日如来→④片倉掘貫→③山堰・掘貫→②取り入れ口→①源水



ガイドマップ

GUID-MAP

○番号 見学場所
コース番号



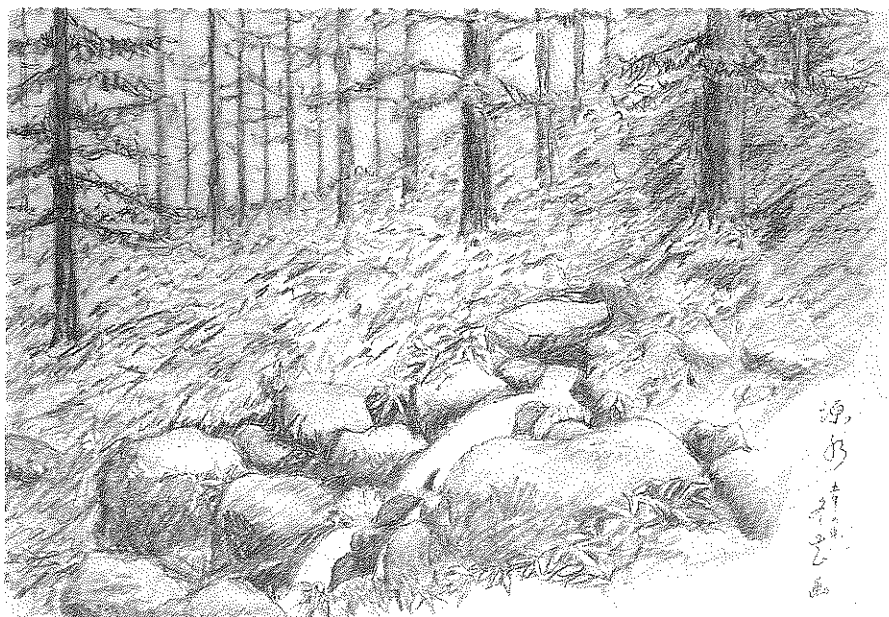


▲ 五郎兵衛用水源水（昭和54年ごろ）

1 源 水

（別名 五斗水）

源水を求めて蓼科山に分け入った五郎兵衛は、篠笹の生い茂った山腹や、ツガ・から松の原生林におおわれた深い溪谷を探り歩きました。さんざん苦心したすえようやく蓼科の山頂に近い標高1,900メートルの高所で、双子池の水筋かと思わせる滔々と流出する源水を見つけました。



▲ 源水付近のスケッチ（故柳沢本也氏画）

取り入れ口

2



▲ 合流点

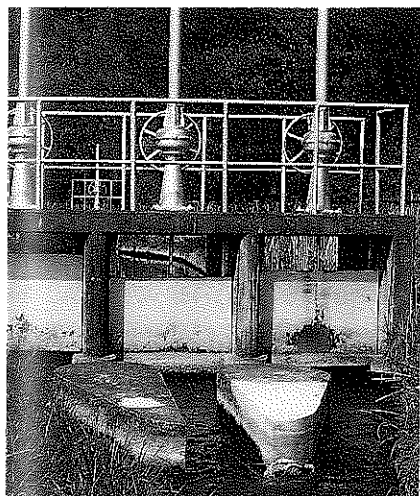


▲ 取り入れ口

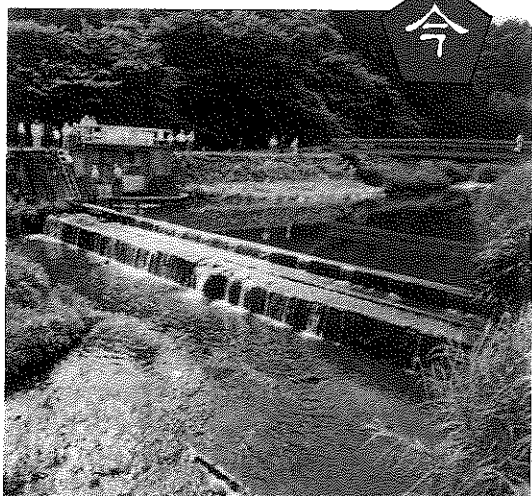
昔

源水の水はすべて細小路川（岩下川）へ流れます。途中いくつかの溪流を合わせて北流する細小路川は、佐久市春日の本郷の北東で湯沢川と合流して鹿曲川となります。この合流点で二流を合わせてせき止め取水しました。ここには用水保護のため制札が建てられていました。源水より約10キロメートルの地点となります。

現在の取水口はこの地点より約50メートル下流に設けられ、手動式の水門によって水



▲ 分水盤



▲ 現在の頭首工

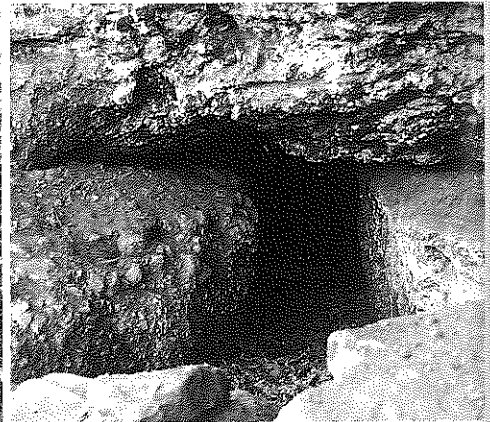
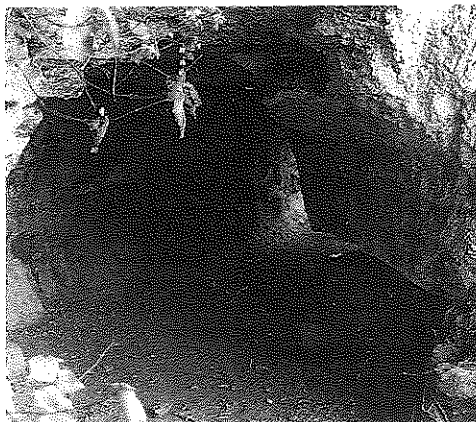
今

3

山堰・掘貫あと



鹿曲川東岸の各所に残る苦心のあと



元文元年（1736）五郎兵衛用水路掘貫

おからがき掘貫	22間（約40メートル）
板縁（ぶち）掘貫	15間（約27メートル）
桜岩掘貫	22間（約40メートル）
片倉山掘貫	150間（約270メートル）
百沢掘貫	85間（約153メートル）
矢島坂掘貫	5間（約9メートル）
宝泉寺山掘貫	25間（約45メートル）
矢島古城腰掘貫	45間（約81メートル）
道陸神坂掘貫	126間（約227メートル）

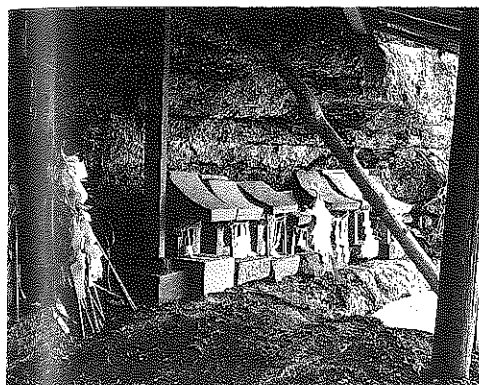
量を調節しています。この浅科頭首工と併せて、御牧原分水工も設けられました。

「おからがき掘貫」「板ぶち掘貫」「桜岩掘貫」は、取り入れ口から片倉までの断崖絶壁を切り開いてつくられました。

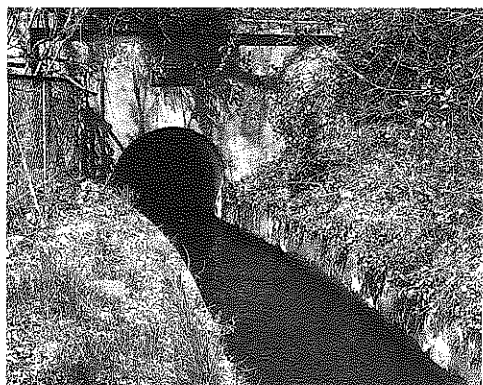
現在でも何か所か残り、工事のものすごさを偲ばせてくれます。



▲ 冬 取水口付近より用水の流れていく片倉方面をのぞむ



▲ 水 神 社



▲ 現在の用水路トンネル入口

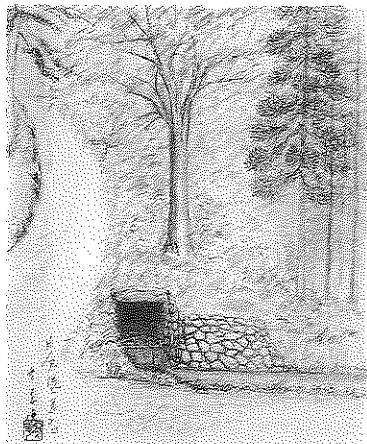
細小路川と湯沢川の合流点でせき止められた水は、鹿曲川の東岸に面して連なる高さ数十メートルの断崖の腹間を掘さくし、あるいは掘貫（トンネル）をつくり、石積みを築いたり木樋をかけて谷を渡し、芝をはったり土俵をふせて水漏れを防ぎ、ようやく片倉地籍に到達しました。この場所は山堰と呼ばれた難所で、蓼科山の噴出物が堆積した凝灰岩砕屑層と砂岩や角礫岩等の累積層の組み合った地層で、鹿曲川によって浸蝕された岩崖です。片倉までの長さは約2,300メートルに及んでいます。五郎兵衛はこの難工事にあたり、石切り職人や鍛冶屋を雇ったり、また人夫の一部を蓼科山へやってたき木をとらせたり、炭を焼かせるなど周到な計画のもとに行ないました。

用水堰路のうち片倉隧道は、全長150間（270メートル）もあり、220余日の日数と3,960人の人数がかかり、また玄米43石5斗6升、灯油1石1斗余、薪250駄、そのほか

4

片倉隧道と遭難碑

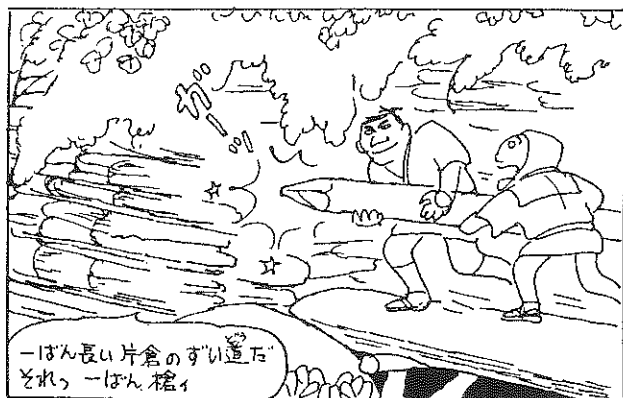
(故柳沢本也氏画)



▲ 旧片倉隧道入口スケッチ



▲ 現片倉隧道入口あと



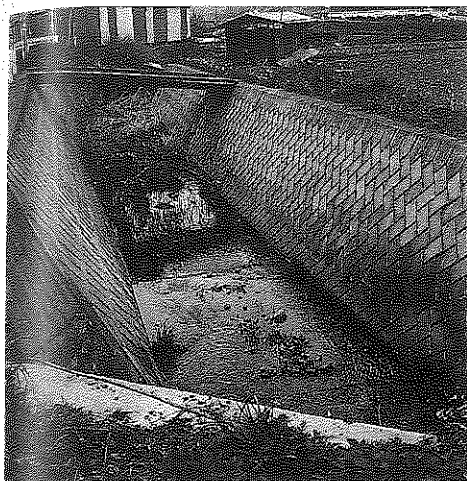
炭・塩・味噌など莫大な費用がかかったことが古文書に記されています。

昭和12年11月27日、御牧原修練農場の訓練生が片倉隧道の実地体験のために坑内に列をつくって入りました。しかし、流水と窒息のため遭難し、救助の効なく8名の若い命がなくなりました。



▲ 遭難碑



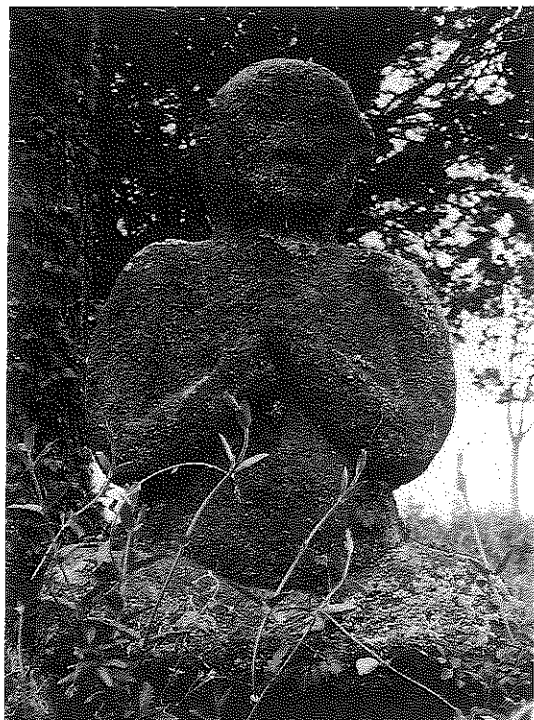


▲ 布施川掛樋あと



片倉隧道をぬけた用水は山腹を下って布施川と合流しようとします。しかし、合流することなく、布施川の上を渡し樋（掛け樋）で通して百もも沢方面へ流しました。

ここから片倉隧道の方向、小高い丘の上に、寛文12年（1672）に造立されたと伝えられる、金剛界大日如来座像があります。これは目を流れる、市川五郎兵衛が長い歳月をかけて開発した五郎兵衛用水の保全祈願のために、同地の市川氏が造立したものであろうといわれています。



▲ 大日如来座像

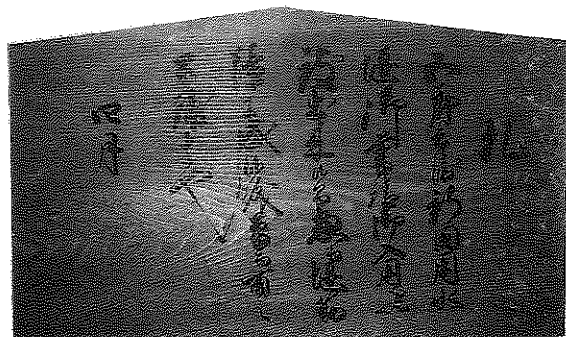
6

八幡制札場

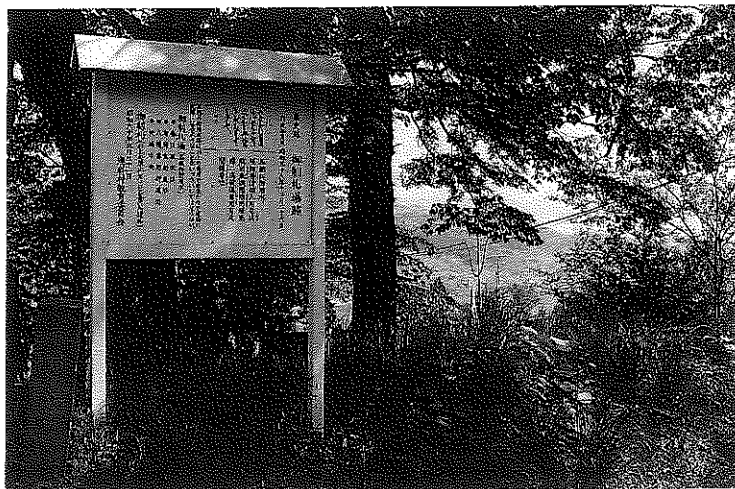
四月

札
五郎兵衛新田用水
堰御普請御入用を以
致出来候間惣而堰筋
障に成候儀普而有之
間鋪者也

(読みくだし文)



▲ 寛文元年(1661)に建ててもらった制札



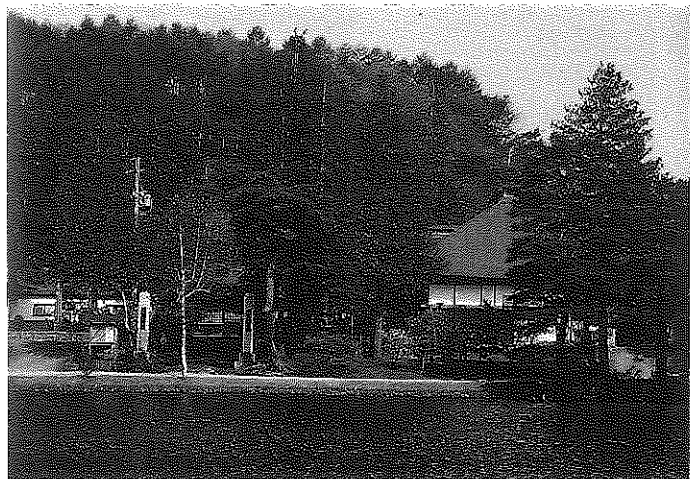
▲ 八幡地区に残る制札場あと

五郎兵衛新田村は、初め小諸城主松平因幡守忠憲領で、ついで慶安元年(1648)には青山因幡守宗俊の預り地となり、さらに寛文元年(1661)には、甲府城主徳川綱重領となり、その後同綱豊領を経て、元禄14年(1701)に幕府

直轄領(天領)となり、幕末に及んでいます。

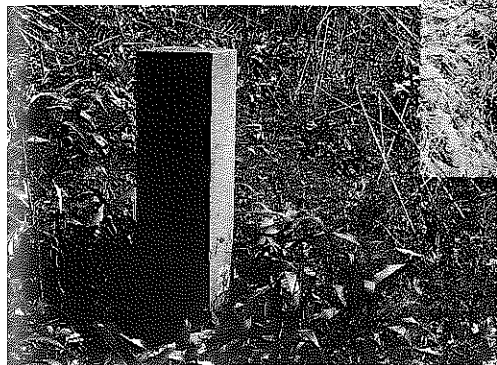
五郎兵衛用水路はよその村を9か村も通って来るわけですから、濁水になった時など盗水されることもありました。五郎兵衛新田村の人たちは領主に願い出て、寛文元年(1661)に上掲の文面の制札を、用水取り入れ口からはじまって用水路の途中4か所に建ててもらっています。八幡の制札場もその中の1か所です。制札では、用水堰の普請など領主の補助金によって行われているのだから、用水につき妨げがあってはならないということを申しわたしています。

7

矢鳥地区と
用水路

▲ 宝 泉 寺

▼ 道陸神坂掘貫あと



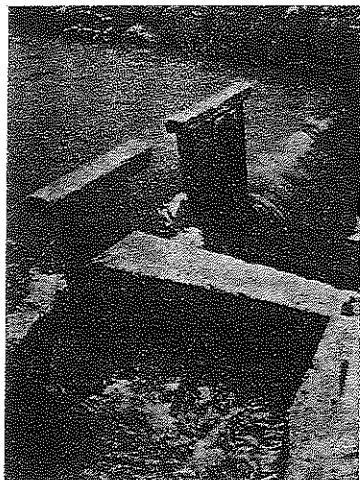
▲ 用水堰あと

「百沢掘貫」をくぐりぬけた用水は、八幡制札場あたりで南へ大きく向きをかえ、山の回りを大きく迂回して矢鳥地区へ向かいます。矢鳥に入った用水は「矢鳥城山掘貫」をくぐり、集落をぐるりと回って「宝泉寺掘貫」をくぐり、さらに「道陸神坂掘貫」によってまたひとつ山を抜けるわけです。こうしてようやく用水は矢鳥原すなわち五郎兵衛新田に到達します。この二つの掘貫は何度も崩落しましたが、そのたびに莫大な費用を労力をかけて復旧工事を行ない、もちこたえてきたのです。

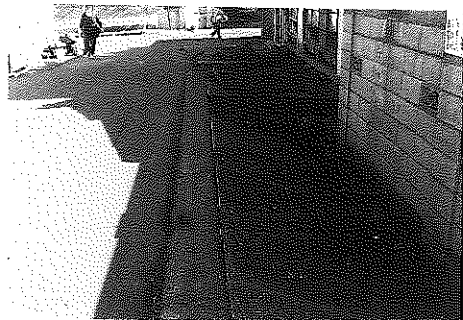
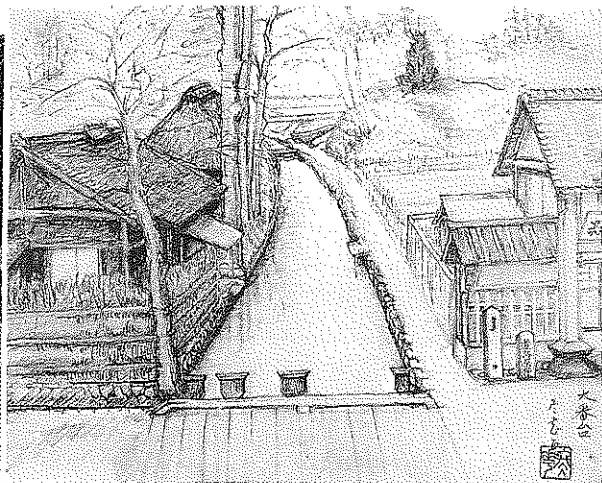
8

上原 大盤台と分水

▼ 旧上原大盤台（故柳沢本也氏画）



▲ 旧分水柵

▶ 現在上原地区
内の用水堰

五郎兵衛新田に到達した用水は、上原の分水盤（大盤台）で3本に分水されます。1本は上原・中原方面の灌漑用に、1本は下原方面の灌漑用に、そしてもう1本は佐久市相浜の灌漑用となっています。

五郎兵衛用水を相浜（当時相浜村）へも分水するようになったのは、慶安2年（1649）からのことでした。なおその代償として、用水の工事にかかわる費用や人夫などを5分の1負担することになりました。

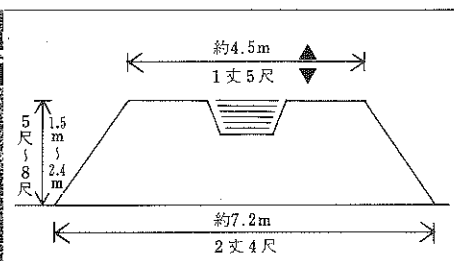
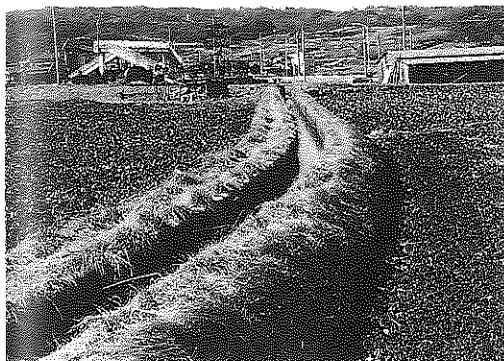
また、この用水は灌漑用だけでなく、日常の生活用水としても使われ、防火用水としても大切に考えられていました。井戸水のない所などはこの水を飲み水としてもつかいました。



9

つき堰 (土樋)

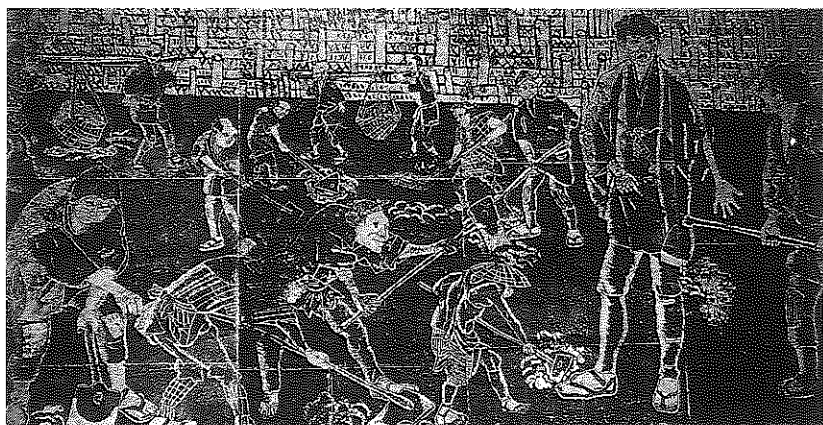
▲▲ 上原～中原付近のつき堰



(つき堰図解)

下原方面へ流れる水路の上原と中原の間には、正徳2年(1712)ころの五郎兵衛用水絵図によれば「土樋六百八十間難所」と記されていますが、この約1,224メートルのつき堰は、下原地区へ用水を流すために、それよりも低い中原地区の堰筋に図解のようにえんえんと盛土をし、その上に溝をつくったものです。つき堰は土で築いたものであったために、非常に崩れやすく、五郎兵衛は大変苦心をしたようですが、この補強のための方法を教えたのが、きよ夫人であったと伝えられています。豆腐の田楽^{でんがく}ざしから思いついて、四角に切った芝を杭で打ちつけ、成功したというのです。また、水もれのか所を発見するために、上流から真綿を流すとか、堰床の水もれを防ぐため「ねこ」(わらで編んだ数物)を敷くことを進言したものが夫人であったと伝えられています。

延長5里あまりの用水路には、掘貫のほかにもさまざまな施設・工事をほどこしていました。宝暦10年(1760)の村明細帳には、この長い用水路に9か所の掘貫のほか、次のような施設があると記されています。



▲ つぎ堰工事の図（版画）（1990.3 浅料小6年3組共同制作）

掛 樋（かけ樋）	2か所	石坎樋（石いり樋）	5か所
箱坎樋（はこいり樋）	2か所	水 門	1か所
石 積	18か所	枿 建（わく立て）	20か所
岩切入	4か所		

水を引くためにさまざまな工夫をしていたことが分かりますが、これらも当時としては進んだ土木技術を示すものといえましょう。

五郎兵衛用水の維持・管理

五郎兵衛用水の開さくは、大量の人夫・多大な資金、そして高度な技術によってようやく達成されましたが、それ以後350余年もの長い間、村人はどのようにしてこの用水を維持し、守ってきたのでしょうか。

用水が取入れ口から田んぼまで流れて来るために、やらなければならない仕事はたくさんありました。

用水普請

春になると用水にたまっている落葉やごみを取り除く「せぎ^{ざら}浚い」に始まり、崩れたりこわれたりした場所の修復をする「当普請^{あてぶしん}」、また大雨などで水路が傷んだりした

時など村中総出の普請作業を毎年繰り返してきました。

この普請について、宝暦10年（1760）の村明細帳には次のように記されています。この用水路を維持するために、春中の用水路の浚い普請人足が3,400人から3,500人前後、さらに夏の小破繕い、ならびに用水路の補強のために、ねこだを敷いたり芝をはったりする人足が、やはり3,400人から3,500人前後かかり、全部では年間7,000人前後の人足が必要だったと記されています。また領主からの報しゅうは、この頃になると支払われなくなって、全部村の負担となってしまったことも分かります。こんな状態がずっと続くわけです。春から夏にかけて村人がいちばん忙しい時期に、1軒あたりのべ40人近くの人足をささなければいけないわけですから、大変なことでした。

しかし、毎年休むわけにはいかないことでした。休めば用水が来なくなり、その結果いちばん困るのは村人です。このことだけを見ても用水路の維持作業が村人にかかる負担の大きさが分かります。

また、享保18年（1733）の「五郎兵衛新田村用水入用帳」から、村人は人足だけでなく、さまざまな費用の負担もしなければならなかったことも知ることができます。

・ねこだ130枚 ・土橋の掛けかえ材料 ・掘貫の浚い普請に使った油代 ・岩を掘るつるはし3丁代 ・掘貫でともしたたいまつ代 ・布施川橋修繕のために雇った大工賃と材料代などです。なおこの年、普請のために働いた人足の総数は5,269人と記されています。

以上は通常の維持作業の様子ですが、このほかに掘貫が崩れたりすると、村人はこれ



▲ 用水普請にはげむ村人たち

を修復しなければなりません。これがまた一大事業だったのです。天和二年（1682）の矢島山掘貫修復の記述によりますと、この時長さ120間の掘貫が崩れてしまったので、そのうちの80間（約144メートル）を新掘貫にすることを計画していますが、工事費用の見積もりは次のようです。

・栗の木間切り（まぎり）代金 ・金掘り320人の日当 ・間切りを組む大工日当 ・鍛冶屋120人の日当 ・さかてと鍛冶炭の代金 ・油6斗の代 ・雇人足の米代 などの合計43両 その他の人足が計1,710人と記されていますが、特別に雇う人足のほかは村人自身が働くわけですし、必要な費用も村人の負担となっているわけです。

なお、掘貫の間切りに使われる栗材は、5里余りも離れた大日向村（現佐久穂町）から750本買い入れ、これを運ぶのに750人の人足を使ったことも記されています。

用水管理

用水を守る仕事は、普請工事のほか普請のための検分・用水路の見廻り・分水や番水の管理など休みなく続けられてきました。この中心となったのが、五郎兵衛の生存中は家臣の「堰守」でした。五郎兵衛が用水の権利を村に委せた頃からは「堰役人」の仕事となり、明治以後になると「常設土木委員」の仕事となりました。「堰役人」は村役人の中では最も重い役目で給料も常に名主と同じ額、時にはそれ以上のこともありました。

また、用水を村人の田へ公平に分配するために、番水の制度を定めました。開発当初はこのきまりを乱す者があると、村を追放されるほどのきびしさで取りしまり、現在まできちんと守られてきました。

五郎兵衛用水は、このようにして開さくされ、このようにして守られてきました。ここには先人たちの血と汗がしみこんでいます。こうした歴史の遺産としての五郎兵衛用水路を、私たちは今後も大切に守っていかねばならないのではないのでしょうか。



主な参考資料

1. 「五郎兵衛と用水」改訂版 伊藤一明著
2. 「五郎兵衛新田と被差別部落」 斎藤洋一著
3. 「まんが市川五郎兵衛物語」 水谷たけ子著
4. 「五郎兵衛用水」浅科村文化財調査報告書 第3集
5. 文禄2年12月16日「家康朱印状」(市川家文書)
6. 寛永3年12月 「小諸藩開発許可状」()
7. 「北佐久郡志」第二巻 歴史篇
8. 故柳沢本也氏スケッチ (柳沢日朗氏提供)
9. 写真提供 五郎兵衛用水土地改良区、佐久市



五郎兵衛記念館

編集 五郎兵衛記念館
発行 佐久市教育委員会